



～はじめに～

こんにちは。この度は、私が1年半前に始めた登山について書かせていただきました。

内容は、どの山に登りそこにはどのような景色や苦勞があったかという事ではなく、私と山の出会いや山を通して感じたことや思った事を、この1年半の個人的なメモ書きの様に記してみましたので、登山に興味がない方にもご一読頂けると嬉しく思います。

1. 山との出会い

山と私を結んでくれた人物は2人いる。そのうちの1人が、高校時代に共にラグビーで汗を流した友人でもあり、初めての本格登山のバディである。

彼から誘いを受け、滋賀県にある伊吹山に登ることとなった。冬の2月に持ち合わせの装備での挑戦だった事や、標高が上がるにつれ深くなる足元の雪と一時はホワイトアウトするような吹雪であったため、6合目にある小屋に一時避難し、途中下山した。翌週には、小屋で出会ったベテラン登山者からのアドバイス通り最低限の装備を揃え登頂した。

今読まれている方は、十分な装備もなく初めての登山で雪山に挑戦するのは危険だと思われたはずだ。ぐうの音も出ない。しかし、この日見たもの感じたものが今でも、次はどここの山へ登ろうかと私の頭と体を動かしている事は確かだ。途中下山した初登山は、幼少期の夏休みに田舎にある祖父母宅で、当時の私の背丈ほどある大きなスピーカーから爆音で流れていた、あのブルーハーツから受けた衝撃にも似たものを感じさせてくれた。

2. 上司との出会い

1回の登山でその楽しさに囚われ2ヵ月経った頃、人事異動で私の向かいの席に来られた上司が、登山用具メーカーのボトルをデスクで使用していたため、確信に近い気持ちで山が好きなのか尋ねた。この上司こそ、2人目の登場人物であり、キリマンジャロ登頂の経歴も持つ超社会人級クライマーであった。その後、上司から

テントを譲り受け、残雪期である4月に槍ヶ岳で初めてのテント泊や、月明かりとヘッドライトのみでの山行を経験した。登山経験が浅い私と友人の2人だけでは挑戦できそうにない山へも、経験豊富な上司に付いていくことで、日本アルプスをメインに次々と登頂することができ、より一層山の楽しさや奥深さを感じるようになった。

3. 山に登る理由

「なぜ山に登る？」という質問を受けることが度々ある。私の場合、夏山より登山人口が圧倒的に少なく危険とされる雪山を好んで登っていることから、この質問には多くの場合、理解不能といったニュアンスが含まれているが、一年半前の私からすると全く同意見だ。なぜなら、運動は元々好きだったが、当時の私は自然に対する興味は人並みどころかほぼ皆無であり、更に高額な装備を買い揃え遠征してまで、危険で不自由が多く、ただただ寒い雪山に進んで登るようになるとは微塵も思っていなかったからである。どのような目線で考えても、山に登る理由について質問者が納得できる回答ができた試しは無い。ただ、それぞれに好きな食べ物やスポーツ、音楽、芸術、作家やファッションなどがあると根本は同じであり、明確とは到底言えないが、言葉にするのであればこれが最も近い。



写真-1 赤岳山頂 (左:私 中:上司 右:友人)

例えば、私は野菜全般が美味しく好きなのだが、好きではないが健康のために食べるという人もいるだろう。野菜を食べると同じ行為だが、後者は健康のために食べるという理由があり、前者は食べたいという願望があるから食べているだけだ。登山も同じで、理由を付けるのであれば根本にある山に登りたいという願望が一番の理由といえる。

4. 山の魅力

私が山に登る理由については先述の通りであるが、これでは山の良さが伝わらないので、振り返ってみて感じる山の魅力を記していく。

山の魅力とは、山でしか見ることのできない景色や澄んだ空気を味わうことの他に、山で得たものは街でも生きてくることだ。これは体力や筋力が付く事や有事の際にちょっとしたサバイバルができるという事を言いたい訳ではない。例えば、住む場所があり、電気・水道・ガスがいつでも使えること、おいしい食べ物や飲み物が容易に手に入ること、今まで不快に感じていた気候や気象条件について良い意味で鈍感になったこと、健康に生きていること、街並みや風景をよく見るようになったことなど、これまで気にも留めていなかった日常生活の些細なものが色を持ち、普段の生活を豊かにしている。元来そこに存在していたものに、実感を伴う気付きを与えてくれたとも言える。いずれ薄れていくこの色彩を取り戻すために、何度でも山に向かっていると思う事もある。私が夏山ではなく、日常から逸脱した環境である雪山を好むのも、これに通じているのだろう。

5. 山に登る準備

続いて、登山をする上で最も大切な要素である荷造りから気付くこともあったので、それを記していく。

登山を行う際の荷物の選び方は、大別すると2つの考え方がある。どちらも安全を第一に考えているのは共通だが、1つは遭難等の緊急時を想定して飲食物を多めに用意することや汗や雨で肌着が濡れてしまった場合の替え（低気温下で衣服が濡れると急激に体温を奪われるため非常に危険）を用意すること、各種装備自体の重量を犠牲にする代わりに多機能で堅牢な装備を使用すること等により、荷物の重量は増えるがリスクを分散させるという考え方だ。もう1つは、機能性や耐久性を犠牲にした軽量化な装備を採用することや飲食物を必要最低限とする事で、荷物を軽量化し移動スピードを高め、リスクに曝される時間そのものを短くするものである。これには、狭い所や足元が不安定な場所の歩行にも優れるという利点もある。実際に準備に取り掛かる際には、自分がどのようなスタイルで登りたいのかを明確にした上でルートか

ら食料計画を立て、その日の山の気象を参考に装備を選定する。これら食料や装備をバックパックに詰める際には、荷物の量に見合うサイズのバックパックに、上下左右前後の重量バランスや現地での素早い物の出し入れを考慮したパッキングをする。これを山に登る度に繰り返し行い、つたない経験と可能な限りリアルに目指す山や起こりうることを想像することで、無事に下山するために最低限必要な装備や求められる性能と、緊急時にしか使用しないが必ず携帯しておいた方が良い物、他で代用が効くものやあった方が快適だが命には関わらない物が区別できるようになってきた。ここで言う命には関わらない装備の部分を調整し、目的に応じた最適な装備を選定することで、時の流れや自然を楽しむための登山、トレーニングのための登山、頂上に立つことが目的の登山など、より幅広く楽しめるようになった。

山に登る準備は、できる限りリアルに物事の全体を想像し、そこから緻密に逆算していくことで、今求められるものや道筋が見えてくる事を気付かせてくれた。

6. 山と社会と個

山は基本的には独立した閉鎖空間であり、単独登山の場合は全ての決定権を自らが所有していることになる。複数人で登山をする場合は、そこに小さなコミュニティが生まれ、休憩のタイミングや何かしらの要因により途中で下山を決断する際など、自分の思い一つで動くことは出来なくなる。これを人間社会に置き換え広げていくと、友人や家庭といったコミュニティから学校や会社、自治体や国、究極は地球というコミュニティだろう。

これらコミュニティの中での個人の在り方として、集団に属する以上は協力・協調することが大事だが、刻一刻と変化する環境の中で集団の流れに身を任せるだけでは、“赤信号、みんなで渡れば怖くない”で言う所の赤信号を渡った事すら気付けなくなるのではないだろうか。流行りやその場の空気、周囲や多数派の意見、一般論、集合知といったものを傾聴することはあっても、それら



写真-2 中央アルプスから西日を撮影

に身を任せて思考停止するのではなく、自分が大切だと思うことは本質を捉えた上で納得できる自らの答えを持っている。こうした考え方は、人・物・情報に満ち溢れた現代社会においても結構大事で、これを怠ることは山で道を見失う事と同じだと、勝手だが信じている。

～おわりに～

冒頭で記した通り、山と出会ってから私個人が感じた事や思った事を綴らせていただきました。

このような機会を頂き、この1年半を振り返ってみてまず感じることは、山を知るきっかけを作ってくれた友人と、仕事や登山でお世話くださる上司のおかげで、新たな楽しみや感性を持つことが出来た事への感謝です。極端な例であるとは思いますが、自然に対する興味や、記録を写真として残す事に対する興味が皆無であった私が、今では季節を問わず山に向かい、登山のみならずキャンプや沢遊びをし、美しい景色をカメラに収める程自然に対して興味を持つ様になり、本文でも述べた通り日常生活にまで良い影響を与えてくれました。

山から受けた影響についていくつか記しましたが、実際に山を登っている最中は、あの様な煩わしい事は一切



写真-3 幕営の様子

考えておらず、自然を感じることや次の足をどこに置くかという事以外、殆ど何も考えておりません。これも魅力の一つです。他には、単独登山と複数人での登山では違った楽しさがあることや、同じ山を同じ時間に共に登っている仲間ですら、頂上を目指しているという事以外は登る目的も違えば、当然違う感性で違った感じ方をしており、下山後のボリューム満点の食事や温泉、帰路に就く車内などでこれを共有することも登山の楽しさではないでしょうか。